

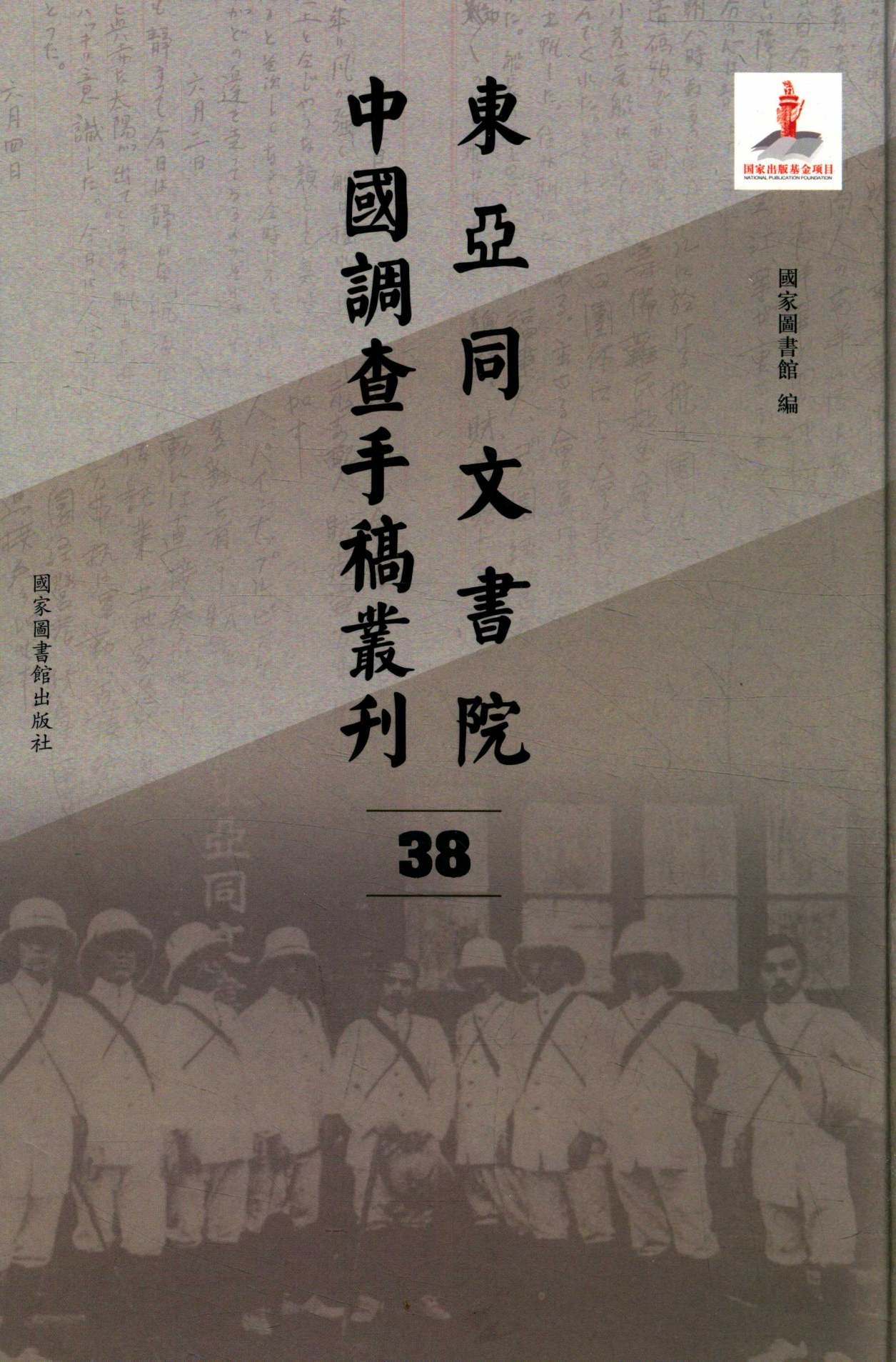


國家圖書館 編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

38

國家圖書館出版社





國家出版基金項目
NATIONAL PUBLICATION FOUNDATION

國家圖書館編

東亞同文書院
中國調查手稿叢刊

38

國家圖書館出版社

第三八冊目錄

昭和六年（一九三一）旅行日誌（第二十八期生）

橋本綱雄 藏居良造

第二十三卷

..... 一

昭和七年（一九三二）旅行日誌（第二十九期生）

稻葉幸衛※

田中一男

第一卷

.....

一一七

第二卷

.....

二二七

岩松武 土屋定國※

第三卷

.....

三六三

磯西英次

第四卷

.....

五九一

昭和六年

旅行日誌

南支那支那台灣遊歷記

橋本綱雄
藏居良造

六月一日

曇

同學諸兄の熱心なる送別の款に益々感激を加へ、午前八時校門を出る。未だ見ぬ南國への憧憬に夢生逐ひ、遂に旅略に對し、希望と不安の交錯は名残すべからざる感に慨を伴ひ。
「果して所期の目的を達し得るだらうか」

浦東側の日清汽船碼頭より上船す。船名は高山と呼ばる。午前十一時出帆也。馬場久保田、小竹の三先生及び多量の同學諸兄にあの有名な「汽笛」を吹出帆間際歌はれた時は、今でもちうくうろこむが、實に何と云はれぬ感に銘にうたれたものだった。

新緑に包まれた吳淞、懐しき上海をばしの別れ也。先づ船長に敬意を表して名刺を呈出して置く。言ひ所によれば海賊が出没するところや、或は式を厳重にし、一等船客の方は固く午後五時以後艀に身られ、我々の同居を許して呉れない。支那の海賊にも困ったもの

だが、南京政府は何故かと罷し、取締りめだううとどちも出て来る。

雲南か、四川か、南支沿岸調査か、と同船、一行全部十五名也。

六月二日 晴

天気晴朗波静かで、穏々たる海原のみ。前も云つた如く
午前八時より午後五時までは上甲板に遊ん、居られるが、以外の時
は三等船室に居るに居らねばならぬから、狭く、勝手が悪いといふぬ。
甲板客の支那人は充満して居る。少し、便所に行くと、一層である。
實際大の田力が、 $\sim$ と上甲板に上つて、行く時は全然、鞭を放
たれた虎の威で、我ながら物のあはれを感じざるを得ぬ。船の
速度は能達大陸式で遅々である。夜間は面白い話で、屋に
凌ぐといふものだ。

六月三日 晴

(船上)

今日は昨日に比べて波は少し荒れるやうだが、大して問題となるまでに至らない。午前午後甲板で涼風に吹かれ、夏の熱いとも忘れてしまふ。厦内に午後十一時着くとの事で急に元気づく、早く寝込んで明日早く起きようと思ふ。

六月四日 晴

朝早くから支那客がやか／＼言っているさうしたまうぬ、五ノ嵐君大橋君が餘程しづまるべく怒鳴っているが、少しもやみ／＼でない。八時前一等の方に移るよいといふ通知をうけ、欣然として移動を行ふ。何でも厦内や一等艙客が下船したころ空室が出来たといふ事。

甲板に出て見れば、眼前には夏目をうけた厦内の所が近代

的新しきを展開せし居る。坂場先生の例の中國人の不潔な
 所は此處だと思へば、やゝ印象は不思議といふ外何物もない。
 厦門停港は午後四時まで、午に聞て、早速身仕度して上陸の用意
 をし、先づ領事館を訪ねた人と林氏（船中より知合）と三人でカン
 パンを催ひ、上陸す。館に到れば、青島領事を二面、他かの
 面々が威儀を三して居る。取り交されておれは諸君はなに
 厦門のようしく大歓迎聞てしまふ。奥田、豊島両先輩
 が此處に勤めて居られる。我々三人は先輩岡本氏紹介の
 和久井四君長を訪ね、二のちから種々厦門の事情を聴取
 す。それによれば（大略であるが）

厦門在留邦人

内地人

男一六八名

女一八〇名

朝鮮人

男女計二名

台灣人

男女合計七五七名

外國人

八三九名

支那人

一八四、三六七名

外人別

英

男一三八名
女六一一名

米

一〇八名
七三〇名

佛

九名
二八〇名

西

二七
二三

其他

和蘭陀人、丁株人、露、独スエーデン等

總人口

一六四、九八四（廿年、九月調査）

外人官署

英、米、佛、和、白、蘭、西、丁株、ノルエー等

団体名

口氏虎縣部、總工會、總商會、青年工作會

婦女解放協會、木匠、電氣、油漆

6
郵務 以下六十團體

厦門の所は何となく明るい気分がする。道行く支那人は
とても愉快だ。モダン・ガールの綺麗さなど、すうすうと歩く様は
新興の気分が燃えて居る。でも云い得るなら、異国的な
半熱帯的な所で、太陽はまぶしい程照りつけ、其の美
しかるべき女人の顔もあざ黒だ。午前は日光巖を貝物し
書画は墨島、奥内両先輩の脚馳走さうく、午後は
領事館のボートで厦門の支那所を見る、どうして高きところ
建物が見えられあつて、道路の広さ支那随一の所なん
か云ふ成程は少しもない、併し舊路は一向幅員で非常に狭い
ものである。民路を走つて中山公園に遊ぶ、船の出帆は
少々遅れて午後八時過ぎとなる。有名な華僑陳嘉庚
は当地出身である。

六月五日

晴

午前十時汕頭領事館に到る。戸樺木先輩が領事代理で
よく指導し、よく馳走を呉れた。此の所は

人口十七万常 三の中

台湾人四百千、日本人七〇で

日台居留民会の合同のものがあり、会長は日本人で一名、
副会長は台、日各二名で羅君が又一人の副会長の
一軒子と認められらるゝとか。

言語は汕頭語のわけ、今こゝのものか語され、官界では流石に
北京語を語されゝとか、当地に於ける日本人林健之は

料理店

菓子雜貨

床屋

藥屋

一

小學校

三名

○、ふくも、日清決起事務所、校関に一名

領事館を辭して、東京麻學校を見學する。日台友の生徒が
居り學校は相當整頓しておた。台湾總督府の経営である。台人
の眼で教員團いだか案にあさやかであつた。

これより更に台民に學校を見學させて置く。聞く所によればこの
所の負託は乃至は金庫の類は皆その中に入れ、それ／＼仕事と
擔けるやうに制度組織をして、社会政策を施してゐるといふ事。
中山公園を見學したが感に於ける程でもない。道路はアスファルト
で水は自動車が通つてゐるから所も流石に南方に於ける一都
市であるに取らぬ。羅君のお父さん位當り三購分りて行か
ないで校園に官村先輩と新ねる。此處で同割れる我々は

領事館に福山署長を訪ね、署長の見待をうけ、署長は熊本
縣人で、老中国とかで、在支在留二十余年、行政警察の力に
盡き、居られのやある。一泊をさせて貰ひ、盛んわ馳走をうけて
床に入る。

六月六日

晴

六時半頃目覚まし、朝食を即馳走にうけて、羅君の案内で、
嵩山丸におちつた。後未だ時内も餘りある。こわれは、嵩山石に
は行く、中學時代習ったあの桃源郷其まゝのやうな感じして、
不思議な別天地といふ感じがする。と迫る。此處は、嵩山石
中學であり、山上に樹々うれてある。

午後三時出帆、波相多にけりし。最後にこれら園々をうけて

が汕頭には三十餘の賭博場が公用され、その収金より得る収入は、五十万圓といふ少からざる収入となるとか。

六月七日 晴

汕頭 香港内は海賊が非常に多いとかいふ言で我々も相も興味を持てぬものゝ、遂に出現を見ず、午前十時香港に到着し、山腹にマウナ箱を並べた市街といふ言好景があるが香港内よりある、水は青々として、深い水ありと感ぜられ、各船の汽船は輻湊してゐる。東洋有数の港たるに恥ぢない港である。惜しいことは背負がなく、仲継港たるに過ぎないだらうか、而して將來もこれに過ぎないだらうか。

上陸後旭館に到着し、午後三時より九龍半島の尖端をドライブする。大陸の一角をなした九龍半島、新田組

借地の一面は愉快に、その儼が一時尚やアし得た。途中山間田路
を長馳して九龍鉄路に這ひ、宋王台を右に眺め、九龍城
壁を右にして、九龍フネリーに歸る。宋王台は一七四年の

四月南宗の端宗皇帝が元兵を辟けて、此處に赴け、居を
とした所とか。九龍の海岸は二万呎三万呎の船が横けり得
る所で、それ程深く將來は英國も九龍の方を發展して行く
ことだろう。現に岩石崩して、住宅を造るに妨げで、文化住宅の
新築のしようが非常に多かつた。

九龍見物後香港島に移り、植物公園を見物する。一名
ビクトリア・パークとか名づけられ、山腹にある植物園である。此處に
は熱帯の花辨草木が、顔郁として、其の香を放ち、公園の中央
に塩水ナリ、フアーサー・ケネディーの銅像は、嚴然としておし、眺望
は非常によかった。